社会が生む更年期 －SNS からみる当事者への影響－

健康スポーツマネジメントコース
５０２３Ａ３２１－７　山口　由紀　　研究指導教員：中村 好男 教授

【背景】

昨今見聞する女性の更年期を取り扱う情報の多くは，付随する社会問題を含めて，更年期には何かしらの問題が起こるものだという概念を色濃く表しながら，身体的・精神的問題に対処することを当事者に要請している．

更年期とは本来個人的な経験であるとロック(2005)は著書の中で指摘した．実際，女性の更年期に対する受け止め方の重さには個人差があるが，一方，当事者からは自身の不調や問題の有無に関係なく，更年期はつらく，大変なもの，解決したいものという類似した認識で語られることがある．

当事者が表出する更年期の認識の背景に，取り巻く環境や日常で触れる情報など，様々な社会的因子が生む更年期像の影響があると考える．

【目的】

本研究の目的は，更年期を問題とする当事者の認識が，どのような社会的因子に影響を受けているのか検証することである．

「更年期」は閉経前後を表す時間概念であり，「更年期障害」と同義ではないにもかかわらず，両者はしばしば混同して用いられる．(山本(2001))

本研究においては，更年期を更年期症状・更年期障害を含めた言葉と定義する．

【方法】

1. 2020 年代初頭のブログ記事 3 件に対する内容分析
2. NHK のサイト内に 2020 年以降に投稿された「更年期」の記事 27 件の掲示板のコメント計 107 件に対するテキストマイニングを用いた単語出現回数と共起回数分析，コメント内の文脈の単位と内容分析

【結果】

1. ブログからみえた認識

心身の不調や違和感と共に，妻や母などの役割や，年齢，仕事などの社会的な役割についての主題が，自身を更年期とする文脈の中に示された．

2. 掲示板からみえた認識

1)更年期をどのように認識しているかについて，コメント中の単語出現回数をみると，名詞は症状や医療を表す語が上位であった．形容詞は「辛い」，「ひどい」などの語が上位を占めた．また共起回数において，更年期を症状や受診，薬，治療など医療と結びつけて捉える傾向があることが示された．

2) 107 件のコメントの文脈から，「症状」・「仕事」・「妻」・「母」・「娘」・「女性」の 6 つを単位として抽出し，その出現頻度は以下のとおりだった．

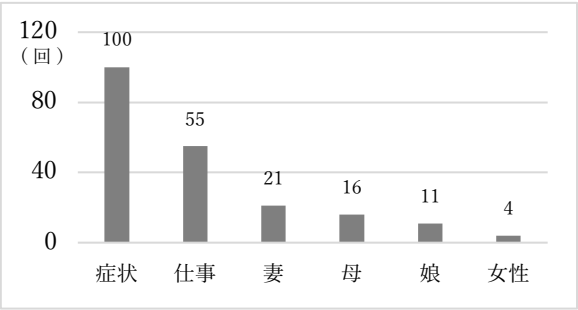

図 単位出現回数

3) 掲示板のコメントからは，更年期は症状があり，つらいものであるとした上で，自身の身体を通して仕事や家庭の環境にその影響が波及するという認識が示された．

【考察】

当事者はブログや掲示板において，自身の苦悩を明らかにしているだけではなく，日常で触れている情報や社会的な規範による暗黙の前提に影響を受け，更年期を問題のある事象と認識していることを示した．その因子は以下の通りである．

①更年期：身体的・精神的不調が起こる，特徴的な症状がある，ホルモンの減少が原因である，管理するのは医療である．

②仕事：個人に安定した生産性が求められる，より責任のある役職につくべき，男性と同じように働くべき．

③性別役割：家族に対して役目をまっとうすべき，女性とはこうあるべき．

これらにより，更年期は当事者の内発的な問題ではなく，社会によって生み出される問題でもあるということができる．

これらの因子が，当事者の更年期の認識に影響を与える背景を考察していく．

1. 更年期の医療化

2020 年に更年期障害を含む閉経期及びその他の閉経周辺期障害の患者数は 22 万 2 千人となり，2008 年以降増加している．また更年期治療薬の売上高の増加もみられ，その市場ニーズは高くなっている．

2020 年代において，更年期を自然な生物学的変化ではなく，ホルモンの「欠乏症」が原因とする考えにより，疾患として医療の対象とされている状況がある．製薬に代表されるテクノロジーの進化，診断する医療機関や検診などの環境整備，更年期であると診断される患者数，更年期を問題とする情報や社会環境などの社会的因子により，以前には医療の管轄とは考えられていなかった心身の状態が医療の対象になることを指す「医療化」は確実なものになったといえる．

2. 当事者が進める医療化

厚生労働省が 2022 年に行った「更年期症状・障害に関する意識調査」から，更年期の不調がホルモンの減少により起こるとする当事者側の認識が示された．この医療的な概念は，取り巻く環境や見聞きする情報から影響を受け当事者側に存在しているといえる．

本研究が抽出した掲示板のコメントにおいて 107 件中 100 件が，更年期を問題とする視点の上で，自覚的な身体的・精神的な不調を訴えていた．医療は「正常な生活を送るためのチケット」の役割を果たし，日常の中で医療に対して持っている期待は，医療がその期待に答える可能性がある限り，依存の範囲と深度を拡大させる．これを更年期に当てはめると，当事者が更年期において不調のない状態を医療に求めるほど，医療化を進める力を持つということができる．

社会が更年期を医療化することは，当事者の認識に影響を及ぼし，さらに医療を消費する状況を生む．

3. 良妻賢母の履行

ロック(2005)は，当事者は社会的な規範の下に，その不履行を更年期のつらさとして語ると指摘した．女性の性別役割の規範として，「夫や舅姑に従順に仕える」「家庭の家政を取り仕切る能力のある主体的な妻」「知識による内助や女性の道徳性」を要請する良妻賢母思想がある．本研究の対象のコメントにもその規範に従順である認識は示されている．この思想の端緒は 1895 年だとされることから，家庭の中における女性のあるべき姿の前提は 100 年以上経っても変わらない．

4. 経済活動の場にある規範

仕事において個人の安定した生産性が求められる規範に対して，それを履行できないという不安や自責などが更年期とともに示され，かつて家の中を守る役割であった女性の役割を果たす場が家の外にも拡大したことで当事者の更年期の認識に影響がもたらされているといえる．

5. 免責されない更年期

当事者は概ね，身体的・精神的不調を表出しながら更年期をつらいとする，自身を病人として扱う概念を示していた．社会も医療化により，更年期の当事者を病人として扱いながら，一方で規範によって経済活動の場における役割や女性役割を免責させないという，病人役割の概念が適応されない構造が存在している．

【結論】

本研究はインターネット上にある当事者の更年期についての書き込みから，更年期を問題とする当事者の認識が，どのような社会的因子に影響を受けているのか検証することであった．当事者に影響を与えた社会的因子は以下のように抽出された．

1）更年期の自然な生理的変化を医療の対象とする医療化

2）社会が良妻賢母や，女性らしさを要請する社会的文化的規範

3）経済活動の場における役割や女性役割を免責させない社会構造

上記の因子に対して，当事者はその従属を把握せず，インターネット上に自身の苦悩を表出していた．

昨今，更年期は概ね当事者の身体に起こる内発的な問題として扱われるが，実際の問題は，日常で触れている情報や規範など，社会の中で捉えられる更年期像から発生している側面がある．つまり，更年期は社会が生むということができる．

当事者が更年期をつらく乗り越えたいものであるとするとき，その認識は何によって形作られているものなのか，改めて当事者自身も問い直す必要がある．また，発信される情報の何が誰の問題なのかということについての一層の分析は今後の課題である．